

平成 22 年 6 月 24 日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2007～2010

課題番号：19320047

研究課題名（和文） 18世紀イギリスにおける女性の言説と公共圏 - 文学研究と歴史研究の断層と結節点

研究課題名（英文） Women's Discourses and the Public Sphere in Eighteenth-Century Britain: The Alliance and Disjunction between Literary and Historical Studies

研究代表者

富山 太佳夫（TOMIYAMA TAKAO）

青山学院大学・文学部・教授

研究者番号：70011377

研究成果の概要（和文）：

18世紀後半から19世紀前半にかけてのイギリスにおいて、社会の多様化や消費文化の進展、国外への帝国主義的覇権の伸長が起こった結果、イギリス国内にいる女性にとっても公共圏が複層的、複次的に展開していった。「私 / 公」の境界線は、ジェンダーによってはもとより、社会階層によっても、また家族構成によっても、まったくそうなる形で形成され、その複層性・多元性の実態を文学および歴史資料の中から精査した。同じ女性であっても状況によって複数の境界線が存在し、意識されていたのであり、さらにはその境界線自体が明瞭なものではなく、曖昧なグレイ・ゾーンであったことである。Mary Wollstonecraft や Charlotte Smith のような女性と Hannah More や Jane Austen それぞれが、一定の範囲内であいまいな「公共圏」を想定し、そこに共存しつつも、消費、政治、宗教、情報、地域といった様々な領域において異なる public/private の境界線を意識し、言説として公表してきた。全体として、家庭イデオロギーが19世紀初頭にかけて支配的になっていくのは明らかであるが、しかしその状況において女性たちは異なる「公 / 私」の境界線上を往還運動していたのである。

研究成果の概要（英文）：

The demarcation of private and public spheres became increasingly difficult in the late eighteenth and early nineteenth centuries, when social mobility increased rapidly along with the expansion of the British maritime powers overseas and the growth of consumerism at home. Women were not entirely confined to the 'private', 'domestic' sphere alone. According to her class and individual circumstances, each woman moves out of a private sphere into a public one. And her public spheres existed in multi-layered forms. Discourses by women writers during the period reflect their consciousness of multi-layered public spheres. Mary Wollstonecraft, Charlotte Smith, Hannah More, Jane Austen, Frances Burney, Mary Hays, Anna Laetitia Barbauld, and Maria Edgeworth, all envisaged variegated lines drawn to divide private from public spheres, in various regions of life, such as politics, consumption, religion, communication, and community. As a whole, domestic ideology grew increasingly powerful towards the early nineteenth century, as Evangelicalism gathered its momentum of influence over national life, but it did not preclude women from multiplying their public spheres and being active in them, as we see them in their writings.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	5,200,000	1,560,000	6,760,000
2008年度	4,600,000	1,380,000	5,980,000
2009年度	5,400,000	1,620,000	7,020,000
総計	15,200,000	4,560,000	19,760,000

研究分野： 英米文学、イギリス史

科研費の分科・細目： 文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：女性、近代イギリス、公共圏、ジェンダー、セクシャリティ

1. 研究開始当初の背景

そもそもこの研究は研究代表者である研究代表者である富山が『文化と精読』に所収されたいくつかの論文で展開したような18世紀の女性文学、ジェンダー、ポルノグラフィに興味を抱いたことに端を発する。その後、この基盤研究に参加する研究者との学術的交流の中で女性の言説と公共圏という大きな問題提起がなされ、領域横断的な一大共同プロジェクトとして企画されたものである。これまで文学研究では著名な作品をとりあげて時代・社会背景との関係を議論することが普通であったが、本研究では歴史学と思想史の研究者とイギリス文学研究者が合同で研究することにより、今まであまり取り扱われてこなかった多種多様な言説を分析することを試みる。文学的な言説の分析には文学研究に一般的な考察方法を必要とするが、時代・社会背景考証に際しては歴史学のアプローチを採用することで言説の歴史的考証を徹底的に追究することを企図する。言説といえば、言説に権力による抑圧と排除の作用を見るミシェル・フーコーがすぐに取り上げられるが、フーコーの分析は必ずしも歴史的なコンテクストを明らかにしてはいない。言説は確かに権力の影響を受けることもあるが、その生成の根幹はもっと具体的でかつ日常的なコンテクストにあり、感性的なもの、笑い、欲望、感動、信仰心といった感情であり、精神の動態でもある。18世紀の女性の言説の裏にはそうした不可視な社会的情動が未分化なまま横たわっており、それらを領域横断的な共同研究によって実証的な分析を行い、浮き彫りにしていく。その方法論において大胆な領域横断を図ることも本研究の重要な課題とした。

2. 研究の目的

本研究は、文学研究と歴史研究の両方の観点から、18世紀イギリスの中流階級女性による多様な言説を実証的に分析し、そこから彼女たちがどのような公共圏を思い描き、その公共圏に関与しようとしていたのかを解明する領域横断的な研究を目的とした。ユルゲン・ハーバーマスの『公共圏の構造的変貌 - ブルジョア社会の一区分についての考察』(ドイツ版1962年)が1989年に英訳されて以来、近代市民社会の形成と成長の歴史的過程に関する英米圏の文学・歴史学研究において、「公

共圏」はきわめて重要かつ不可欠の概念となっていた。しかし、それは必ずしもハーバーマスの論を無条件に肯定するわけではなく、彼が描いたブルジョワ的男性市民社会の政治的・社会的・文化的空間について再吟味と批判を加えるためでもある。特にハーバーマスの公共圏は、女性の存在を完全に無視している点で大きな問題を投げかけてきた。本研究は、そうした研究動向を踏まえながらも、これまであまり注目されてこなかった種類の女性の言説において表象される公共圏やジェンダーの問題に着目することで、女性と公共圏のあり方について新たな光を照射しようとした。

3. 研究の方法

研究の分担・責任はテーマと素材の2段階で分けた。基本的には研究代表者、研究分担者全員がすべてのテーマについて、すべての言説を吟味することが望ましいと考えたが、研究を効率よく進めるためにそれぞれの関心と実績によって中心的役割を果たすべきテーマおよび言説の種類をそれぞれ決めて、分析・調査を行っていった。テーマについては研究目的で述べたように、セクシャリティ/ジェンダー、教育(知的活動)、消費(経済活動)、宗教、慈善活動、階級・民族意識、政治的活動の7項目を掲げ、参考文献や研究動向の報告、問題提起を行う担当責任を割り振り、それぞれのテーマについて礼儀作法書、(幼児)教育書、女性雑誌、風刺(画・文学)、ポルノグラフィ、宗教文学、書簡、政治パンフレットといった文学研究ではあまり省みられない言説においてどう捉えられて入るのかを分析を試みた。

主な役割分担とそれぞれが着目する観点については以下の通りであった。研究代表者である富山太佳夫が、現在の批評の動向を踏まえながら画期的な研究成果がえられそうな言説の素材、批評、分析方法について吟味・選択しながら研究遂行を図り、必要があれば研究全体の方法的なバランスを調整し、研究結果をとりまとめる、あるいは新たな問題点の指摘をして次の段階の研究課題を提示していった。高橋和久(研究協力者)、川島昭夫(研究協力者)は幅広い視点と方法的な観点から、それぞれ文学的観点からの分析・調査、歴史的観点からの分析・調査を牽引した。川津雅江(研究分担者)、吉野由

利（研究分担者）文学的アプローチから言説の分析を行い、女性と公共圏のあり方を探る。川津は特にセクシャリティを含んだジェンダー問題、そして素材として女性雑誌と女性詩の分析・調査において責任を持つ。吉野はテーマとしては階級・民族意識についての問題提起を行いながら、Frances Burney, Maria Edgeworth, Charlotte Smithといった女性小説を中心とした分析・調査を行った。梅垣千尋（研究分担者）、山口みどり（研究分担者）は歴史学的アプローチから言説の分析を行い、女性と公共圏のあり方を探る。梅垣は思想史の領域をもカバーしながら、政治活動のテーマにおいて問題提起を図りつつ、政治パンフレットや小説や書簡を含む散文を分析・調査する際に中心的役割を担う。山口はテーマとしては教育について問題提起を行い、調査を推進し、Hester Chapone, Sarah Fielding, Mary Wollstonecraftなどの教育書や礼儀作法書における言説の分析・調査から教育を通じた女性と公共圏のあり方を探究していく。大石和欣（研究分担者）に関しては、文学研究および歴史研究の双方の観点から、復次元的なアプローチを企図する。テーマとしては宗教および慈善に関して問題提起を行いながら、宗教文学、書簡、政治パンフレットといった言説の分析・調査を行った。また、大石は上記の分析・調査でできた問題を整理し、富山の指示のもとで関連文献の調査・精査を行いながら、それぞれの研究成果を記録、まとめていった。さらに、学術研究がなされていない文学作品や言説があれば、富山の指示のもと、それについても関連文献を整理し、毎回の研究会で報告を行った。

4. 研究成果

法律や男性の言説に基づいた公共圏の議論は、この時代に「家庭イデオロギー」（domestic ideology）の支配を認め、女性たちを家庭という「私的」な空間の住人として押し込めてしまう考え方を合法化し、助長することになった。「家庭主義説」と呼ぶべき歴史解釈である。それに対して、女性に課せられた社会的制約を批判的に考究する歴史研究も提出されるが、「公 / 私」=「男性 / 女性」の等式を受け入れている限り、同じ土俵での議論でしかない。たとえ女性の言説を用いて考察したところで、女性に「私」性だけしか認めないのであれば、社会空間としての「公」の実体は見えてこない。

ジョンソンやハーバマスが認めていたように 18 世紀イギリス社会において「公」は単次元であったわけではないし、それゆえに女性にとって複次元の「公」空間およびその概が形成されていたと考えるほうが適切であろう。市民社会が著しく変容を遂げていっ

た時代、特に 18 世紀後半において「公」の意味と空間は多元化していく。その動揺し続ける多元的「公」/「私」の位相の中で、女性たちはそれぞれの立場で異なる「公」/「私」の境界線上を行き来していたのである。

したがって、重要なのは「公」/「私」の峻別そのものではなく、元来「公」/「私」の境界線が透過性をもったものでありながら、異なる社会環境によってどのように微妙に差異化されていったかということであり、そうして重層化していった「公」/「私」の境界線に対して男性であれ、女性であれどう意識していたのかを明らかにすることである。例えば、バーナード・マンデヴィル（Bernard Mandeville）は『蜂の寓話、あるいは私的悪徳、公的恩恵』（The Fable of the Bees, or Private Vices, Public Benefits, 1714, 1723）の中で、個人主義にもとづく私的利益追求が公共の富を築き上げていく逆説的社会構造を示したが、それはまさに当時分離されつつあった「私空間」と「公共圏」の連続性を経済活動の観点から指摘したにすぎない。1721 年に出版されたジョン・トレンチャード（John Trenchard）の『カトーの手紙』（Cato's Letters）にも、「公」が「私」としての人間（男性）の「集合体」であることが明記されている。

つまり、「公」/「私」は一枚のコインの表裏のような厳密に区分された領域ではなく、つなぎ目が見えにくい連続しよじれた円環が複数に層をなしたものとして考えるべきではなからうか。社会の発展とともに専門職化と分業化が進むにつれ、人々は「公」と「私」を区別する必要に迫られると同時に、多元化していく両者の連続性と分離を意識せざるをえなかったのではなからうか。貴族の館が、選別された個人客をホストする私的空間になる場合もあれば、ときに地域の社交や政治の中心的トポスとして公共空間に変容するのも同じ原理であるし、18 世紀末から郊外へ移住した国教会福音主義者たちが仕事と家庭という二つの空間を区別していく一方で、市内や地方の村々では仕事と家庭は混沌としたまま共存し続けていた。家庭空間が確立したと思われるヴィクトリア朝時代になっても「公」/「私」の位相は動揺し続けていくのである。

「公」/「私」が錯綜し、その境界線が揺れ動く中で、女性たちも男性主義的公共圏の周縁で動揺しつづける。18 世紀後半においておびただしく出版される女性の作法指南書（conduct books）において女性の家庭的美德が強調されるのは、一方でそれと逆行するように公共圏で活躍する女性の存在を意識していたからと考えられる。

実際に、1732 年 7 月号の『紳士雑誌』（Gentleman's Magazine）には、ズボンで

はいて馬に乗り、男にコーヒーを給仕させる女性たちがいて、男性の特権を横奪していると嘆く記事がある。世紀転換期にもメアリ・ウルストンクラフトの風刺を含めて同じような男装した女性たちの姿は頻出する。ズボンを穿くということ自体に、常識的なジェンダーの境界線をひっくり返してしまう暴力性を見出していることは確かだが、その背後にはズボンを穿くことで男性と同じ社会空間に侵入し、さらには男性に優越性を与える社会構造をも転覆させてしまう革命的行動への危惧の念が横たわっている。

男装する・しないは別にして、社会で活躍する女性たちは、男性の立場から見るとそれまで当然視されてた「公」/「私」=「男性」/「女性」というジェンダー的境界線を混乱させる曖昧にする脅威の存在であったのである。例えば、ポートランド公爵夫人（Duchess of Portland）に対するジョージ・カニング（George Canning）の評価を考えてもいだろう。彼女は、18世紀末から下院議員として活躍し、後に義弟であるカニング政権下で玉璽卿にも任命されたポートランド公爵の妻として、社交はもちろんのこと、それを通して社会的影響力のある公的活動を活発に行った人物である。しかし、彼女が1844年に死去したとき、カニングは彼女が「偉大な人物」であったことを認めながらも、公的な役職につかない「私人」たる女性に「偉大な人物」という形容を用いるのは適切ではないかもしれないと逡巡する。また、同じく社会的影響力のあったレイディ・レイヴンズワース（Lady Ravensworth）が、1781年に満場の喝采を受けながら劇場の観客席に座るのを目撃したヘンリー・エリソン（Henry Ellison）は、「公人」（a public character）以外にこれほどの歓待を受けたことを見たことがないと驚嘆している。男性が支配すべきはずの公共圏に女性が居残る場合に、その女性と「公」とを切り離そうとする意識が働いているのである。

しかし、18世紀の女性にとって「社交」の場は、「私的」な要素を包摂しつつも立派に「公的」な空間として機能していた。ハーバマスがパブやカフェに寄り集う男性たちの社会空間に公共性を認めるのであれば、女性たちが寄り集うサロンや舞踏会、あるいはヴォクソールやラニラのような遊興庭園にも公共性を認める必要がある。親しい友人同士の社交は、オースティンの『説き伏せられて』でアンが経験したように、完全な「公的」空間とも言えないし、「私的」な空間とも言いきれない。だが、すでに1730年代から紳士階級に属する女性たちが「公的」な場に出かけると言えば、紳士淑女が寄り集う劇場などの遊興施設やリゾート、舞踏会や晩餐会や社交場（assembly, OED 7）、遊興庭園への外出

を明瞭に指していた。ときにはロンドン塔やセント・ポール寺院など観光地さえ含まれたのである。サムユエル・リチャードソン（Samuel Richardson）の小説『サー・チャールズ・グランディソン』（Sir Charles Grandison, 1754）に登場するレイディ・ベティは、ヴォクソールやラニラはもちろん、仮装舞踏会や仮面舞踏音楽会も「公的な場」（public places）と呼び、メアリ・ウォートリー・モンタギュ（Mary Wortley Montague）はそうした社交の場こそ女性にとっての一種の「公教育」（public education）の過程であるとさえ言う。消費文化を牽引するように、彼女たちはロンドンのストランドやベル・メル、ボンド・ストリートなど高級ショッピング街に出向き、買い物も楽しんだが、それもまた彼女たちにとっては「公的」な行為であった。

これらはハーバマスの定義する新興ブルジョワ階級の集う公共圏ではなく、上流階級や教養があり、社会的地位が高い人々がよく集まる都会的で限定的な「公共」の場であったが、地方においても「公」の概念はあった。地方では女性たちは男性や都会の女性のように常に屋外での社交を許されていたわけではなかったが、それでもユニタリアンであり慈善家だったキャサリン・キャップ（Catherine Cappe）が、ヨークでの社交会に出たことを「gone into public」と記したように、一定の範囲内の社交を通して「公的」な行動を楽しんだのである。

また、教会は地方在住の中流階級女性にとっても恒常的な社交の機会を与える重要な公共圏を形成していた。彼女たちの日記や手紙には教会で会った人々、服装、会話した内容などの日常的話題が豊かである。クエーカーの女性たちは説教台に立って「公」の場で説法を行うことをはばからなかったし、それゆえに他宗派の女性から白い目で見られることになった。だからといって女性たちが宗教活動を行わなかったわけではなく、教会を中心にしてさまざまな社交のネットワークや後述のような慈善活動が広がっていくことになる。

女性にとっての「公」は必ずしも屋外だけではなかった。確かに一步外に出れば不特定多数の「公衆」からの視線を浴びることになるが、個人宅にいたとしても、社交の場にいる限り女性はいつでも「公的」な存在になりえた。夫婦も「私的」な関係であると同時に、「公的」な存在にもなりえた。妾のような私的関係は「私的婚姻関係」（privately married）と記述される一方で、上流階級の婚約や結婚は「公」に告示されたし、彼らのスキャンダルは夫婦や家族の間で終わることなく、法廷やメディアにおいて取り扱われる「公的」な話題になる。女性たちは裁判所

にも頻りに通い噂の種を探していたが、その意味で法廷も「公的な場」であった。罪があるにせよ、ないにせよ、不幸にしてスキャンダルの対象となってしまった女性たちは「公的な汚名」(public brand)、「公的不名誉」(public shame)、「公的迫害」(public prosecution)を身に受ける羽目になり、社交を絶って完全に「私的」な空間に引きこもる以外に退路を断たれてしまうのが常であった。

18世紀の女性の言説の裏には上述のような不可視な社会的情動が未分化なまま横たわっており、それらを領域横断的な共同研究によって実証的な分析を行い、浮き彫りになった。この方法論は文学と歴史学の融合にも見えるが、両者は無批判的に調和し、両立できる学術領域ではなく、そこにはれっきとした方法論上の断層がある。それを認識したうえで、言説を分析対象として扱い新たな視座で確保しつつ、双方の研究方法をお互いの見地から批判しながらも、相互補完的に適用していくことにより、これまでに不明であった18世紀の女性と公共圏の関係の実態が明瞭に導き出されてきた。

1980～1990年代において世界的に広まった新歴史主義や新マルクス主義といった文芸批評は、文学研究と歴史学研究的断層を乗り越えようとしながらも、歴史学の方法論を用いることなく、文学テキストを直接的に歴史に結びつけるか、イデオロギー主導による文学テキスト解釈を行うことにより、かえって歴史と文学テキストの乖離をもたらしてしまったように思う。歴史と文学的言説の間にある断層、文学研究における文化の精読と歴史学的な考証との間にある齟齬を確認することから、はじめてあらたな歴史と文学テキストの関係を再構築していくことができる。本研究では、出版、マス・メディア、サロンにおける会話、手紙といった文学的なテーマ、消費主義、宗教、政治、階級・民族意識、教育といった歴史・社会史の領域におけるテーマに加えて、ジェンダーやセクシャリティといった女性学的なテーマを、英文学の研究者を中心にしながらも、歴史学者、思想史研究者が相互批判的かつ相互補完的に協働しながら研究を進めていくことで、18世紀における女性の言説からどのような公共圏が社会空間として浮かび上がってくるかを明らかにしてきた。研究の視点および方法論の両方において極めて斬新かつ独創的であり、これまでにない研究成果を期待することができる。特にベテランといってもいい研究者がやる気と実力のある若手研究者とともに切磋琢磨し、活発な議論を繰り広げたことは意義深いと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計29件 内8件記載)
富山太佳夫(単著)「笑いとはほえみ」『ギリシャ喜劇全集』第4巻月報6、岩波書店、2009年11月、pp.1-4.

富山太佳夫(単著)「恐怖を舞台に」『Shakespeare News』Vol.49, no.2. 2010年1月、pp.3-8.

富山太佳夫(単著)「もつれた岸边」『学術の動向』2010年3月号、日本学術会議、pp.36-41.

富山太佳夫(単著)「公共圏、その光と影」研究成果報告論集「18世紀イギリスにおける女性の言説と公共圏 文学研究と歴史研究の断層と結節点」、平成19年度～平成21年度科学研究費補助金 基盤研究(B)(研究代表者・青山学院大学 富山太佳夫)、(2010年3月)、pp.1-3.(無査読)

富山太佳夫(単著)「人種は何とつながるのか」『自動車泥棒』他、『フォークナー』第10号、松柏社(2008年4月)pp.44-59.

富山太佳夫(単著)「ピーグル号の野蛮人」、『英語青年』(2009年1月号)pp.3-5.

富山太佳夫(単著)「ポストモダンの歴史小説と奴隷制度」『同志社大学英語英文学研究』84号(2009年3月)pp.1-21.

富山太佳夫(単著)「ケアの散乱」『ジェイン・オースティンの研究』第1巻(2007年):pp.3-27.(有査読)

〔学会発表〕(計24件 内8件記載)
富山太佳夫(講演)「ゴシック小説英米対決」日本アメリカ文学会中四国大会、於 島根大学、2009年6月13日

富山太佳夫(講演)「図書館の使い方」鳥取県図書館協議会、於 米子コンヴェンションセンター、2009年7月28日

富山太佳夫(講演)「恐怖を舞台に」日本シェイクスピア協会、於 筑波大学、2009年10月4日

川津雅江「男装のサッポロと女性のセクシュアリティ」イギリス・ロマン派学会第34回大会(四国大学交流プラザ、2008年10月12日)

川津雅江「親密な関係の女性たち」シンポジウム「転換期を生きた女性たち 公共圏の内と外」日本英文学会関東支部1月例会(於

青山学院大学) 2009年1月10日

大石和欣(講演)「奇しきヴィジョン Mary Robinson, 'The Haunted Beach」イギリス・ロマン派講座(主催 イギリス・ロマン派学会)(於 早稲田大学 西早稲田キャンパス) 2008年5月31日

富山太佳夫「フォークナーと人種 英米の奴隷問題」ウィリアム・フォークナー協会(於 広島経済大学) 2007年10月12日

富山太佳夫「ジョージ・エリオットと宗教文学」ジョージ・エリオット協会(於 中央大学) 2007年11月24日

〔図書〕(計20件 内7件記載)

富山太佳夫(単著)『おサル系の譜学 歴史と人種』(みすず書房, 2009年12月)423pp.

富山太佳夫(共編著)『イギリス小説の愉しみ』(音羽書房鶴見書店, 2009年6月)455pp.

富山太佳夫(論文・単著)「動くパノラマを求めて 旅と国家」見市雅俊編『近代イギリスを読む 文学の語りと歴史の語り』(東京:法政大学出版局, 2010年刊行予定) 有査読(入稿済)

富山太佳夫(単著)『英文学への挑戦』(岩波書店, 2008年5月)414pp.

富山太佳夫(論文・単著)「どんな歴史感覚があったのか モダニズムの閉幕」遠藤不比人他編『転回するモダン、イギリス戦間期の文化と文学』(研究社, 2008年7月) pp. 164-86.

川津雅江(論文・単著)「男装の喜劇役者 マライア・エッジワース『ベリンダ』(一八〇一)」十八世紀女性作家研究会編『長い十八世紀の女性作家たち アフラ・ベインからマライア・エッジワースまで』(東京:英宝社, 2009年1月) pp. 181-206. (有査読)

富山太佳夫(編著)「裏返しの技法 小説の伝統も、帝国も」『D・H・ロレンスとアメリカ/帝国』(東京:慶應義塾大学出版会, 2008年) pp. 241-97.

〔書評・その他計23件 内4件〕

富山太佳夫(翻訳)スーザン・ソントグ『書くこと、ロラン・バルトについて エッセイ集1』(みすず書房, 2009年9月) 245pp.

富山太佳夫「コレクション紹介:19世紀のイギリスの挿絵つき雑誌」My CuI .No.12

中央大学図書館(2008年11月) pp. 2-4.

富山太佳夫「解説 稀有作家」デイヴィド・リーフ『死の海を泳いで スーザン・ソントグ最後の日々』(上岡伸雄訳) 岩波書店(2009年3月) pp. 167-74.

川津雅江(書評) Jennie Batchelor and Cora Kaplan eds., *British Women's Writing in the Long Eighteenth Century: Authorship, Politics and History* (New York: Palgrave Macmillan, 2005) 名古屋大学英文学会『IVY』第40巻(2007年11月): pp. 129-33. (有査読)

ホームページ等

<http://www.kazoishi.com/tomiya/index/index.html> (科研HP)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

富山 太佳夫 (TOMIYAMA TAKAO)
青山学院大学・文学部・教授
研究者番号: 70011377

(2) 研究分担者

川津 雅江 (KAWATSU MASAE)
名古屋経済大学・法学部・教授
研究者番号: 30278387

大石 和欣 (OISHI KAZUYOSHI)
名古屋大学・文学研究科・准教授
研究者番号: 50438380

梅垣 千尋 (UMEGAKI CHIHIRO)
青山学院女子短期大学・英文学科・准教授
研究者番号: 40413059

吉野 由利 (YOSHINO YURI)
一橋大学・法学部・講師
研究者番号: 70377050

山口 みどり (YAMAGUCHI MIDORI)
大東文化大学・法学部・准教授
研究者番号: 00384694

(3) 連携研究者

高橋 和久 (TAKAHASHI KAZUHISA)
東京大学・文学部・教授
研究者番号: 10108102
・ 2008年度より連携研究者

川島 昭夫 (KAWASHIMA AKIO)
京都大学・総合人間学部・教授
研究者番号: 00128779